最優秀賞

夜店

青森県八戸市立大館中学校
三年　永洞　真希子



蚊に刺された手がかゆい。足も刺されたみたいだ。手と足の両方ともかゆくてたまらない。夏の夜、外に立ちっぱなしなのだから、蚊が刺すのも当然で、文句の言える筋合ではない。それに、かゆい所をかいている暇なんてない。そんな時間があったら、一つでも多く品物をさばかなくてはいけないのだ。お客さんは次から次へとやってくる。

今日は八月十二日。夜店の日だ。私の祖母は、鍛冶町で毎日朝市に出て果物や野菜を売っている。普通は朝だけなのだが、例年八月十二日だけは夜も店を開くことにしている。十三日からはお盆なので、十二日の夜から翌日の朝にかけて、仏壇に供える果物を買う人で鍛冶町の祖母の店は年に一度の大賑わいとなる。多勢のお客さんに、年老いた祖母だけでは対応しきれない。そこで私や弟、母、母の兄妹が、祖母の店を手伝うことになっている。それでも、店はてんてこまいだ。

「この桃、一皿。」

「はい。これですね。」

「このぶどうは、すっぱいかねえ。」

「いえ、そんなにすっぱくないですよ。」

「バナナはないの？」

「すいません。売り切れたんです。」

お客さんの一人一人に、丁寧に接していかなければならない。笑顔で、一言一言をはっきりと。大きな声で。

「ありがとうございました。」

「いらっしゃいませ」

という二つの言葉には、特に気をつけて、明るい声を出さなければいけない。暗い表情は、お客さんに悪い印象を与え、みずみずしい果物も、おいしくなさそうに見えてしまうのだ。何といっても「お客様は神様です。」

でも、さすがにのどが痛い。それに顔の筋肉もひきつってきた感じだ。口のわきのところが、横に引っぱられているみたい。笑顔一つにも苦労はついて回る。

今日は、特別にかぶと虫も売った。子供たちは、かぶと虫を見てお母さんやお父さんにねだる。お母さんが買ってあげると、子供たちは大喜び。なんともかわいらしい。一人の子供が百円玉を手にしっかりと握って、息せき切って走ってきて、

「かぶと　虫　ください。」

と、ハアハア言いながらこぶしを突き出してよこした。あまりきれいな手ではなかったけれど、とてもかわいかった。

「大事に育ててね。」

と言ってかぶと虫を入れた袋を渡すと、

「ハァイ」

と、元気な返事をして走っていった。

いつの間にか、ぼうっとしていたらしい。

「このリンゴ、五つ。」

というお客さんの声に、ハッとした。リンゴを袋に入れて渡すと、次から次へと、お客さんがひっきりなしにやって来た。どれとどれを、どのお客さんが注文したのか、きちんと聞き分けて間違いのないようにしなければならない。まるで、聖徳太子だ。おまけに、代金やおつりの計算だって正確でなくてはいけないなんて。ああ、忙しい。忙しい。

もう、だいぶ暗くなってきた。時計を見ると、九時をとっくにすぎている。それでもまだ、お客さんはたくさんいる。この光景は、すごくいいなあ。デパートでの買い物より、朝市・夜店での買い物のほうが、何倍も楽しいような気がする。知らない人ばかりなのに、自然に声をかけ接していける。お婆さんたちの会話には八戸訛があって、なんとなく心が和む。言葉でうまく表現できないが、ホワッとしたぬくもりみたいなものがある。

午後十一時。店じまいをして、祖母の家へ行き、今日はそこに泊まる。

午前二時半。まだ、眠ったという実感はない。でも、もう行かないと。朝の仕事が遅れてしまう。外は暗い。昨夜の蚊のあとが赤くはれている。まだ、かゆい。でも、頭の中は、今日もがんばるぞ、という意気込みでいっぱい。

みなさんも、人情味あふれる、朝市・夜店へ、ぜひどうぞ。